

感想文

ニュージーランドの物語

登別市立鷺別中学校 2年 西館 愛音

マオリ族との交流一日目の時、最初は緊張しすぎて話があんまり頭に入ってきませんでした。お互いが歌を歌うと心が打ち解けました。自己紹介の時は、みんなが笑顔で聞いてくれていて、中でも「アナ」という名前の女性が、私の名前「まな」と似ていることもあり、とても親切にしてくれて、すぐに緊張が解けて



いきました。マオリの同年代や年下の子たちと一緒に鬼ごっこなどをして遊びました。私たちを含めて、子どもたち全員で遊んで、みんな一気に仲良くなりました。酋長さんの案内で村を散歩していると、とても大きなマラエ（マオリ族の集会所）があったり、各家ごとに温泉があったり、辺りの空気も登別と同じ硫黄の匂いがして、本当に外国にいるのか、一瞬自分の鼻を疑いました。ホラ貝を吹いてみたり、体の各部分をマオリ語で歌ったり、たくさんのことをマオリの人達と一緒に出来たことは、とても貴重な体験でした。

マオリ族との交流二日目では、マオリの聖地でもあるモコイア島に行きました。そこで、マオリの伝統的な踊り「ハカ」を生で見ました。いつもは、テレビ越しでしか見る機会が無く、また、声量などはテレビで見てもすごいのに、生で見るとさらに迫力がすごくて、鳥肌が立ちました。モコイア島には、世界で七羽しかいない鳥がいたり、大高さんが一番見たがっていたキウィという鳥も三十六羽いたり、という話を聞きました。残念ながら実際に見ることは出来ませんでした。山を登っていくと、きれいな緑の自然がたくさん広がっていました。モコイア島に行く前は平ら場所を探検するだけだと思いきや、ハード



な山登りで死ぬ勢いでした。でも、山頂からの眺めはとてもきれいで、ニュージーランドでしか見られない景色だと思いました。モコイア島での衝撃事件は、煤孫さんが、マオリの子ども達と一緒に湖に飛び込んでいたことです。私もやりたかったなという後悔が少しあります。その後、レインボー・スプリングス自然公園という場所に行きました。うなぎや

珍しい鳥など、たくさんの種類の生き物がいました。キウィの観察館では、清野さんが必死にキウィを探していて、見つけた時の反応がすごく面白かったです。キウィは一日二十時間位寝ているそうなので、とても見つけにくかったです。キウィについての豆知識もたくさん知ることが出来ました。

今回は、ニュージーランドの先住民マオリ族についてや鳥、植物などについて

て、たくさんのことを学びました。とても楽しかったので、また外国に行ってみたいと思いました。これから、いろんな場面で、今回学んだことを生かしていきたいです。



文化交流

登別市立鷺別中学校 2年 表 結羽

今回、登別市市制施行五十周年記念中学生ニュージーランド派遣団の一員に選ばれ、参加出来たことはとても光栄でしたが、実は、内心とても不安ばかりでした。

私は海外旅行に行ったことも無く、英語も不得意で文化交流にはとても興味があったものの、まだまだ先のことだと思っていました。往復の移動では、悪天候や自然災害などで、飛行機が遅れたり、揺れたり、不安でたまりませんでした。しかし、ニュージーランドでは、景色も



空気も登別に似ていて安心しました。英語が苦手というコンプレックスから外国人の人との交流を苦手だと決めつけていた私にも、外国人の方々は、身振り手振りなどで伝えてくれるなど、とても優しく接してくれました。それはマオリの方々も同じでした。はじめは少し緊張していましたが、マオリの方々の温かい雰囲気です緊張はほぐれ、最後はみんなで鬼ごっこなどをして遊び、仲良くなれました。マオリの方々は、自分たちの文化にとっても誇りをもっていました。自分たちの文化を、恥じることも隠すことも無く、顔や体に入れ墨をしていて、マオリの文化を前面に出していました。自分たちの文化を後世へ語り継いでいくことが自然体で、日本とのギャップを少し感じました。日本の社会では、アイヌ民族ということ

を隠す人もいるそうです。でも、アイヌを恥だと思ふことはおかしいと今回の派遣を通して思いました。そういうことを無くすために、まずは、日本人である私をもっと深くアイヌのことを学び、国内だけではなく、少しでも世界中に広げられたらいいなと思いました。そのためにも、世界中の多くの文化を学ぶため、世界に羽ばたきたいと強く思いました。



楽しかったニュージーランド

登別市立鷺別中学校 2年 篠田 悠輝

今回、僕は登別市が50周年を迎える記念である、「令和元年度登別市中学生ニュージーランド派遣事業」に参加しました。

初日は移動しかしませんでした。成田空港で「空飛ぶウミガメ」と言われる飛行機のA360と出会えたのが唯一楽しかったことです。



二日目は、初めての海外で心が躍り、初めてのドルのお札でも心が躍り、「初めて」の連続で一生心に残る一日になりました。車で移動中、オークランドの街並みを見て、札幌の街並みと似ているなど思いました。ロトルアに着いた時には、自然がいっぱいで空気がとても美味しく感じました。カウントダウンというスーパーマーケットがホテルの向かい

にありました。日本のスーパーマーケットの3倍位の大きさでした。

三日目は、マオリ族とのオリジナル交流プログラムが始まりました。歓迎式では緊張しましたが、話していくうちに少しずつ打ち解け合えていくのが嬉しかったです。昼食で伝統料理の「ハンギ」が食べられたのも嬉しかったです。他にも「フェジョア」という木になるフルーツのことを知ることができて良かったです。

四日目は交流プログラム二日目で、マオリの聖地であるモコイア島に行きました。珍しい鳥の羽をガイドさんが見つけたのですが、それをもっとよく見たかったです。山の上から見たロトルア湖は洞爺湖と似ていて、共通点があるなど思いました。この日の夕食のビュッフェは日本のよりもレベルが高く、正直驚きました。肉も美味しく、海鮮系も揃っており、カキやホタテ、サーモンなどが美味しかったです。



五日目は、ロトルアからオークランドへ移動して、初日に行けなかったスカイタワーに行きました。夕食の鉄板焼きは、焼く人のパフォーマンスがすごかったです。料理もとても美味しかったです。

六日目は、日本へ帰る日でしたが、フィリピンの火山の噴火により、飛行機が大幅に遅れ、成田に一泊することになるというアクシデントがあったおかげで、記憶に残る一日でした。

最後に、今回この派遣事業に参加して、ニュージーランドでとても良い経験が出来ました。日本では見られない景色や人の温かさに触れることが出来ました。僕の一生の思い出になります。ありがとうございました。



自然豊かなニュージーランド

登別市立西陵中学校 2年 小野 智章

僕はニュージーランドに行ってきたくさんのことを学んできました。

一つ目は、モコイア島という島に行ったことです。モコイア島はマオリ族の島で、今は誰も住んでいない無人島ですが、天然の温泉が湧いていたり、「プラム」という木の实がなっていました。また、かつてはマオリ族が住んでいた所なので、マオリ族らしい木の彫刻や戦った時に出来た傷が残



っている岩などがありました。山に登ってみると、高さはそんなに高くはありませんでしたが、山頂からの景色はロトルアの街を見渡せて綺麗でした。

二つ目は、マオリ族についてです。マオリ族には「ホンギ」という伝統的な挨拶みたいなものがあります。ホンギは鼻と鼻をくっつけるのですが、それで相手が敵か味方かを判断するそうです。僕もマオリの人たちとホンギをする機会がありましたが、その時に、人間の鼻はこんなにも柔らかいんだなと思いました。また、相手と心が通じたような気持ちにもなりました。マオリ族の伝統料理は「ハンギ」と言います。



ハンギの材料は、にんじん、じゃがいも、チキン、豚肉などです。作り方は、地面に穴を掘って、カゴに具材を入れ、上から布をかけて、さらにその上に土をかけて蒸して作るそうです。実際に食べてみて、食材そのものの良さが味から伝わってきました。しっかりと蒸されていて美味しかったです。



三つ目は、街中で見かける人々です。街には、日本人やアジア系の移民などがたくさんいて、びっくりしました。

四つ目は、見学した施設です。「レインボースプリングス公園」には、キウィバードがいて、本物を見ることができて良かったです。また、ニュージーランドで一番高いタワーである「スカイタワー」

から見た景色は、美しさと迫力があり、素晴らしかったです。

僕は、今回の研修でマオリ族の伝統的な文化を学びました。彫刻などが綺麗に保存されていて、ニュージーランドはマオリ族を尊重していると感じました。ア

アイヌ民族のことを伝えていくには、アイヌ語を広めることが大切だと思います。



ニュージーランドで学び、考えたこと

登別市立緑陽中学校2年 成田 葵

私は今回ニュージーランドに行ってみて、海外というものを初めて知りました。全てが知らないことだらけで、私の目には海外がとても新鮮なものに見えました。

まず、ニュージーランドに着いて思ったことがあります。それは、都会と自然が上手く共存しているということです。ビルだらけでも、少し周りを見渡してみると、緑が見えてきます。これを感じた私は、こんな景色を登別でも見られたらいいなと思いました。なぜなら、自然だけでなく、ビルなど働ける場所もたくさんあれば、若者も都会に行かない人が増えるとともに、地域の活性化にもつながると考えたからです。



次に、マオリの方々とは交流してみたことは、とてもフレンドリーということと、マオリ族の文化を多くの人に広めたいという気持ちが強い人たちだなということでした。フレンドリーというのは、マオリの方々とはとても積極的に話しかけてくれるということです。また、英語も完璧ではなくても、ジェスチャーなどで通じるということも体験したので、周りの人にもそれを話して、英語は文法が合っているかなんて恐れる前に、まずは話してみるのが大切だよ、ということを伝えたいです。

また、マオリの方々とは少数民族ということに恨むわけでもなく、むしろ、誇りに思っているところに、私は尊敬の念を抱きました。私も彼らのように、日本の先住民族であるアイヌの人たちのことや歴史を深く知り、お互いに尊重し合い、アイヌの文化を日本に広めていこうと思いました。

最後に、自分の国の先住民族を、私たちと違うところがあるというだけで差別をせず、お互いにそれぞれの文化を受け入れ、尊重し合い、どの人も笑顔でいられる国にしたいなと改めて思いました。さらに、そのような国を実現するため自分は何が出来るかというところまで考え、つなげることが大事だと思います。

アオテアロアの思い出

北海道登別明日中等教育学校 3 回生 大森 春歩

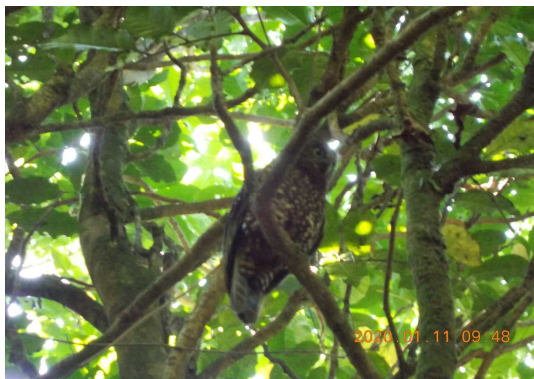
ニュージーランドの研修は忘れられない深い思い出になりました。外国に行くということが人生にどれほど影響を与えるのか、オーストラリアに行った時以来感じられなかったことを改めて感じました。

私には、今回の研修で学んだことが一つ、心に残ったことが二つあります。

学んだことは、「多文化共生」についてです。ニュージーランドはマオリ族だけでなく、アジアなどからの移民も多く暮らしていることを知りました。実際、街では日系人をたくさん見かけることもあり、「外の人たち」として明確な視線を私たちに向けられることも無かったです。また、移民だけではなく、原住民だったマオリ族の人たちとの共生もなかなか興味深かったです。一時期マオリ語は全く使われなくなったと言いますが、そこからどのようにしてニュージーランドを代表するものへとなくなっていったのか気になるところです。

次に、心に残ったことを紹介します。

一つ目は、モコイア島の鳥たちです。



ニュージーランドには多種多様な鳥たちがいるので、鳥の楽園と言われており、事実、見かける鳥の種類は多かったです。モコイア島では様々な鳥を保護しており、ニュージーランドの鳥をたくさん見ることが出来ました。特にフクロウと遭遇し、間近で見られたのは、鳥が大好きな私にとって、とても嬉しかったです。

二つ目は、飛行機が行きも帰りも、ものすごく遅れたことです。行きは濃い霧のため、帰りはフィリピンの火山噴火によるもので、それぞれおよそ3時間も遅れてしまいました。まさか、往復どちらの飛行機も遅れるはめになるとは思いもしませんでした。運が良いのか悪いのか、ここまできるともうわかりません。これも貴重な体験の一つだったと思います。





引率者報告書

令和2年度 登別市ニュージーランド中学生派遣交流事業を終えて

団長：登別市総務部企画調整グループ 煤孫 泰洋

令和元年度登別市中学生ニュージーランド派遣交流事業は、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」、通称アイヌ新法が制定されたことを受け、本市が策定した「登別市アイヌ施策推進地域計画」に基づき、先住民文化の尊重や多文化共生の取組などを学習することを目的に、はじめて実施しました。

ニュージーランドは、総人口の約75%を占めるヨーロッパ系の白人と、先住民のマオリ族や、アジアや太平洋島嶼^{しょこく}国などからの移民が、尊重し合い、違っていることを受入れ、相互に認め合う社会づくりについて、先進的な取組を行っていることで知られています。その実例を見ることで、本市における今後のアイヌ文化の尊重や、増加する外国籍の住民との共生社会づくりの参考にできると考え、訪問先として設定しました。

事業を実施することが決まってから、実際にニュージーランドへ出発するまでの期間がわずか2ヶ月ほどしかなく、委託事業者と派遣生徒の決定、事前研修の実施など大変タイトなスケジュールでし

たが、多くの皆様からのご協力のおかげで、無事に実施することができたことにこの場を借りて心から感謝いたします。

実際にニュージーランドでは、「キア・オラ（こんにちは）！」など、マオリの人々の挨拶が、普段の生活の隅々にまで定着していて、マオリ文化が広く根付いていることを知りました。また、英語、マオリ語と並んで、世界で唯一、手話が公用語とされており、障がいのある人にも住みやすい社会づくり、誰もがいきいきと活躍できる共生社会づくりを目指していることがわかりました。

私自身を含め、参加した生徒たちには、この研修で学んだことを広く地域の皆様にもお知らせし、本市における共生社会づくりを中心になって進めて欲しいと期待しています。

年齢や性別、障がい、国籍や民族、文化、宗教など、違っていることを相互に受け入れ、多様性のある登別市を築いていくために、楽しかったニュージーランドでの時間を思い出して、頑張っていきましょう。

「カ・パイ・アオテアロア（ありがとう！ニュージーランド）」

登別市中学生ニュージーランド派遣交流事業を終えて

登別市総務部企画調整グループ 大高 由美

〈派遣行程、交流内容などの報告 ～ 帰国報告会から ～〉

今回、私は引率者の一人として、ニュージーランド派遣に同行してきました。私からは、事前・事後に実施した研修の様子、現地での行程やエピソードなどについて、報告したいと思います。

まず、出発前には事前研修を4回行いました。

(株)JTB北海道事業部の清野さんからは、ニュージーランドの概要に始まり、現地での旅程や持ち物、あったら便利な物まで、いろいろなことをきめ細かくレクチャーしていただきました。最終回には、ニュージーランドとスカイプを繋いで、現地スタッフの方から生の情報を届けていただきました。

私の方は、主に簡単な英会話を担当しました。基本の挨拶から、飛行機の中や入国審査での英会話までを、みんなで学びました。最終回は、自分について英語で表現してみようと題して、単語から始まり、家族のメンバーや人数、自分は何が好きか、嫌いか、それはどうしてか、など、どの生徒さんもいろいろと考えて、話してくれました。これは、現地でマオリの方たちと最初に対面した際の自己紹介に役立ったと思います。皆さん、緊張はしていましたが、一生懸命話し、また、とても上手でした。

1日目 1月8日(水) 成田～オークランドへ

1月8日、たくさんの人たちに見送っていただき、市役所を出発しました。順調だったのは、ほんのここまでで、このあと乱れに乱れたフライトスケジュールに翻弄されたのは、ご存じの方も多いと思います。千歳から乗る飛行機がなかなか到着せず、千歳出発が遅れ、羽田到着が遅れ、成田へのリムジンバスに乗り遅れ、最終的に分乗したタクシー3台で成田へ向け疾走しました。どうにか、成田でのチェックインに滑り込み、ここで当初のスケジュールに追いついたはず。「さっ、あとはニュージーランドに出発するだけ」と、私は完全に高をくりました。

ニュージーランド行きの飛行機に搭乗し、シートベルトを締めて、30分…1時間…あれっ？ 1時間半…え、まだあ?? 機内アナウンスは「濃霧のため離陸見合わせ中」とのこと。外を見ると雪かと思うほど真っ白でした。途中で飲み物は配られましたが、

おしりは痛いわ、お腹は空くわ、忍耐の2時間半でした。離陸した時は、隣にいた結羽さんと顔を見合わせて「飛んだあ～～！」と、胸をなでおろしました。いよいよ最初の機内食タイム。飲み物の注文やメニューの選択も、簡単な英語で問題なく出来ていたようです。

2日目 1月9日（木） オークランド～ロトルアへ

2時間半遅れでオークランド空港に到着しました。一旦空港から出て、午前中は市内見学のはずが、オークランド博物館で、昼食を含め1時間半ほどの見学のみとなりました。見学は駆け足でしたが、最初にこの素敵なお建物が見えてきた時、生徒さんたちがすごく喜んで、「この建物を見られただけでも来て良かった。」なんて声も上がっていました。

そしてまた、空港へ戻り、両側2列の小さなプロペラ機でロトルアへ向かいました。キャビンアテンダントさんはたった1人で全部まかしていました。

ホテルにチェックインし、荷物を部屋に置いて、初めての外での食事に出かけました。中国の火鍋と韓国風焼肉のお店でしたが、ウェイターはタイで働いていたネパール人という、面白いお店でした。帰りにホテルの向かいのスーパーマーケットに寄りましたが、これも生徒さんたちにとって初めての経験。外国のスーパーマーケットの魅力にはまる子は何人いるかなあと眺めていました。

3日目 1月10日（金） マオリ族との交流プログラム1日目

翌日のロトルア1日目は、朝食の時間を決めて集合。やはりお寝坊さんはいました。でも6人全員きちんと朝食をとり、いよいよマオリの人たちとの交流プログラムに出発です。由美子さんという日本人女性のコーディネーターさんが付いてくださり、半日とても有意義な時間を過ごしました。

歓迎の儀式から始まり、^{しゅうちょう}酋長さんのスピーチ、初めにお話した英語での自己紹介、お昼には、とても手間のかかる伝統料理ハンギのランチを出していただきました。そのあと散歩を兼ねて、酋長さんに町内をいろいろと案内していただきました。

また、マオリ語の歌や楽器の体験と、盛りだくさんのプログラムでした。ギターを弾ける葵さんがマオリの子たちと一緒に歌の伴奏をしてくれるのを見て、楽器で交流できるのも良いなと羨ましく思いました。

帰る前のひととき、生徒さん全員が、マオリの子たちと鬼ごっこをして庭を走り回って遊んでいました。これは、言葉がいらないので、緊張しない楽しい交流だったと思いま

す。私は、少し離れたところでギターを弾いていたマオリのお父さんと息子さんと、Let It Be を歌いながら、みんなを眺めていました。この2人はマオリ語でも Let It Be を聴かせてくれました。おいとまする時、何人かが「私、明日も行くから～」とか、「また明日ね！」と言ってくれて、明日も同じメンバーに会えることに、少しホッとしました。

このあと、ロトルア市内の地熱地帯にある公園へ寄り、なかなかの距離の散歩をして、最後は足湯で疲れを癒しました。ただし温かくなかったので、ここは「足水」でした。ホテルに戻り、荷物を置いて、歩いて夕食へ出かけました。この日は中華料理でした。

4日目 1月11日（土） マオリ族との交流プログラム2日目

ロトルア2日目は、ロトルア湖の中にあるマオリの聖地である無人島モコイア島へ渡りました。このロトルア湖というのは洞爺湖とほぼ同じ大きさで、モコイア島は洞爺湖の中島の4分の1ほどの面積の小さな島です。船に乗る前にはお祈りをしました。20分ほどで島に着いて、島の奥へ足を踏み入れる前に、並んだベンチに座って儀式がありました。この時に生の「ハカ」を見ることができました。オールブラックスほどの人数はいなくとも、その迫力に圧倒されました。そのあと、伝説の残る露天風呂、祈りを捧げる聖なる岩、サツマイモの神様の岩などを見せてもらいました。

そしてメインイベントの山登りとなりました。当初、もっと軽いハイキングと聞いていたのが、なかなかの登山で、室蘭岳のヒュッテから山頂ぐらいあったのではないかと思います。体力の無い私は一番最後のグループでよろよろと登っていました。そんな中、とても幸運なことが待っていました。

なんと野生のフクロウに出会ったのです。一緒にいたマオリの人も、夜行性のフクロウを見られるのは本当に稀なことだと喜んでいました。少し進むともう一羽現れました。フクロウは山の神様とのことで、私はマオリの女性と手を取り「今日は良い日だ！山の神様に歓迎されている！なんてラッキーなんだ！」と大喜びしました。同じグループにいた鳥好きの春歩さんが大喜びでシャッターを切っていました。

山頂に着き、休憩を取り、ロトルアの町を見下ろし、全員で写真を撮り、あっという間に下山となりました。途中、ひざに故障をもつ愛音さんが痛みを訴えたので、ゆっくりゆっくり下りてきました。思ったよりもハードな山登りで負担がかかり、かなり痛いはずなのに、話しかけると笑顔で返事をしてくれる様子は本当に頑張り屋さんでした。もう少し気遣いできていたらと、後悔し反省しました。

下山後のピクニックランチは、サンドイッチとマフィン、ポテトチップスとリンゴに水、と

いう外国ならではの弁当でした。このあとは船が迎えに来るまで、自由時間でした。温かいお湯が湧いている湖畔に足を浸けたり、その辺で拾った木の枝を投げて、プラムの実を落として食べたりしていました。悠輝さんと智章くんは、熟した赤い実を狙って、鋭い投げっぷりでしたが、落ちてくるのはなぜか黄色い実ばかりでした。それでも、食べてみると充分甘い美味しいプラムでした。

島から湖畔へ戻るとき、船の操縦をさせてもらったのも、体験した生徒にとっては良い思い出になったことでしょう。ニュージーランドでは、小型船舶を操縦する免許は無いということでした。

岸に着き、2日間一緒に過ごしたマオリの方たちともお別れです。鼻の頭を2回くっつけ合うマオリ独特のあいさつ「ホンギ」を全員と交わして、たくさんのお礼を言ってお別れました。温かい大家族で、すてきな人ばかりでした。

このプログラムは、コーディネーターの由美子さんが、これまでマオリのことに色々取り組んできて、信頼関係が出来ているからこそ実現できました。おかげで、本当に貴重な体験をさせていただきました。

このあと、レインボースプリングスという、きれいな水の湧き出ている植物園兼野鳥園のような施設へ行きました。ここでは、ニュージーランドの国鳥キウィを見られるとのことだったので、実は個人的にすごくワクワクしていました。みんなで乗りたかった水に落ちる乗り物はつい10分程前に終わっていて叶いませんでした。日が長くて明るいので、いつまでも昼間のような気がしていたら、その時は既に夕方5時を過ぎていたのです。

園内には固有種の植物がいろいろ育っていて、固有種の鳥もいろいろ飼われていました。見学経路の最後は、キウィのいる真っ暗な部屋です。通路の両側にガラス張りの部屋があって、キウィがいるはずなのですが、一向に見つけられません。最後の最後に「これかな？」と思ったのは、まあいコロンとした30センチメートル位の塊でした。でも、微動だにしないので、決め手に欠け、「キウィを見つけた！」と信じるしかありませんでした。私は、昼間のフクロウで運を使い果たしたと思いました。仕方なく売店でぬいぐるみを買って、気持ちを静めました。キウィははっきりと見ることはできませんでしたが、オールブラックスのシンボル、シルバーファーンも見て、ほかのシダとの見分け方などもガイドさんに教えてもらい、とても楽しかったです。今日はそのまま歩いて夕食場所まで移動です。

ゴンドラに乗り、山頂にあるバイキングのレストランで食事をしました。並んでいる料理は本当に国際色豊かで種類が多く、少しずつ取っても制覇しきれませんでした。ホ

テルに戻り、腹ごなしに向かいのスーパーマーケットへ女子2人と繰り出しました。私も少しお土産を調達できました。今夜は荷物のパッキングです。みんなもちょうと出来たかなと思いつながら、もったいなくて寝付けませんでした。

5日目 1月12日（日） ロトルア～オークランドへ

翌朝は、出発前の集合時間だけを確認して、朝食は各自に任せました。早く支度ができた私は、朝食後フロントにトランクを預けて30分ほどプールサイドで過ごしました。変わった鳥が屋根の角に止まっていて、その面白い動きを眺めているだけで、あっという間に集合時間になりました。

出発時、煤孫団長や清野さんに、忘れ物は無いかと再三聞かれて、全員元気に「大丈夫です！！」と返事をしました。ロトルアの町なかのファーマーズマーケットを少し見たあと、ロトルア空港へ向かいました。その車中、ホテルから電話が！

「カメラを部屋にお忘れの方がいます。」

この時から、悠輝くんは「忘れ物大王」と呼ばれることになります。このあともあちこちで大王の本領を発揮していくのでした。大王がカメラを取りに、ホテルへ戻っている間、他のメンバーはチェックインを済ませ、サンドイッチとリンゴのお昼ご飯です。戻ってきた大王も取り急ぎチェックインをし、ロトルアのガイドさんともここでお別れです。小さな空港のあちこちを見ているうちに、すぐに出発時間がきました。また、小さなプロペラ機でオークランドへ戻ります。

初日の市内見学を端折ったため行けなかった、オークランドのランドマーク「スカイタワー」へ、ホテルから10分ほど歩いて向かいます。328メートルのタワーは南半球で一番の高さだそうです。私たちは186メートルの展望台まで行きました。ぐるりと歩いてオークランドを見回せる通路は、ところどころ透明なガラス板がはまっていて、真下に地上を見下ろせるドキドキの仕掛けでした。こういうものが大好きな私は、上武さんに乗ってもらい写真を撮ったり、外国人のおじいちゃんの手を引いて一緒に渡ったりしました。生徒さんたちも自撮りなどをして、楽しんでいました。こういうのは女の子たちの方が強いような気がします。

このあと、夕食の時間まで、清野さんの道案内で豪華客船が停泊する港まで歩きました。でも、どこも工事中だらけで、あまり景色が良くないことが残念でした。

ニュージーランド最後の夕食は「鉄板焼き」でした。数日ぶりのご飯に味噌汁。やっぱりホッとしますね。メインのお肉は好みの焼き具合に仕上げてもらい、全員大満足だ

ったのではないのでしょうか。また、歩いてホテルまで戻ります。明日は早朝出発です。

6日目 1月13日(月) オークランド～成田へ

最終日…最終日になるはずでした。朝6時、オークランド空港に向けてバスでホテルを出発。40分ほどの間、初めてリラックスして外の景色を眺めました。荷物を預けて、チェックインを済ませ、搭乗口へ向かうまで自由時間です。朝のサンドイッチがもの足りなかった私は、日本料理店でパックのお寿司を買って、1人フードコートテーブルでスマホの充電をしながら食べました。このいつもの食べ過ぎが、のちのち助けになるとは…思いもしませんでした。

さて、搭乗ロビーでは、待てど暮らせどゲートが開きません。「またか、今度は何??」です。なんと「フィリピンの火山が噴火したため、出発見合わせ中。」とのアナウンス。

全員「ええええええ～～～～～?噴火??なんで今???

その後、待つこと2時間。ルート変更・スタッフの打ち合わせし直し等を経て、やっと離陸したのはお昼過ぎでした。みんなお腹が空いていたことでしょう。私は…お寿司のおかげで…こっそり平気でした。たまには、食べ過ぎにも良いことがあるのです。

2時間半の出発遅延。11時間半ほどのフライト後、ついに成田空港に到着。ルートを変更したため約3時間半遅れ、時刻は夜の9時。もう千歳へは帰れません。あえなく成田で一泊となりました。

7日目 1月14日(火) 成田～千歳～登別へ

さあ、今日こそ最終日！ 成田の朝はおだやかな冬晴れ。でも、朝食後ホテルの外を散歩しながら、疑う心をどうしても拭えない私でした。なぜなら…成田一泊の朝方、関東地方で結構大きな地震が発生！ 眠りから覚めるほどの揺れでした。これですっかり起きてしまった生徒さんもいたようです。どこまでも何かが起こる旅です。

しかし、このあとはいたって順調。成田空港から羽田空港へのリムジンバスもすいすい。羽田空港から千歳空港への飛行機はJALの最新鋭機。美しい機内、心なしか飛行中の音も静かで快適でした。

そして、ついに千歳へ着陸しました！ フライトのドタバタで大変な苦勞をしたのは、全部清野さんでした。何か起こるたび、迅速な連絡・対応、鬼のような速さのパソコンへの打ち込み。仕事とはいえ、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。清野さんとは、ここでお別れ。1人札幌の会社へ出向いて行かれました。

私たちは、懐かしい登夢くんバスに乗り込み、市役所へ帰着しました。保護者さんたちに出迎えられて、生徒さんたちはホッとした様子でした。前日、到着が遅れるとか、成田に一泊することになったとか、連絡を入れている時から「早く家に帰りたい。」「声聞いたら、会いたくなかった〜。」と、こぼしていたので、どんなにか安心したことでしょう。みんな、リクエストどおりの晩ご飯を食べられたかなと思いながら、私も帰宅しました。このあとは恒例の洗濯&片付けです。

こんな、ドタバタ事件だらけですが、マオリの方たちの温かさに触れられた、あつという間の、4泊6日が5泊7日になった旅でした。

さて、私はこれまで、別事業である中学生をデンマークへ派遣するプログラムに5回ほど関わらせていただいてきましたが、引率者の現実や苦勞を知らないまま、あれもこれも、お願いばかりしてきた「送り出すだけ専門家」でした。しかし今回実際に派遣されてみて、見えたことや感じたことが、本当にたくさんありました。それを、今後自分の業務にどう生かしていくかが、私の大きな課題です。

〈 派遣研修を終えて 〉

今回派遣された生徒6人のうち5人にとっては、初めての海外でした。初めての出国、初めての国際線、初めての機内食、初めての「外国」…旅の前もいろいろな事がどんなにか不安だったことと思います。しかし、最初から最後まで、女子同士、または男子同士、時には男子女子関係無く、何かと助け合って7日間を過ごしていました。参加した生徒の誰もが「いつかまたニュージーランドへ行きたい。」と話していて、ニュージーランドを気に入った様子を見ると、心に残る良い時間を過ごせたのだなど、心から嬉しくなります。

今回のテーマである「民族共生」。これを学ぶためのマオリ族との交流プログラムでは、政治的・社会的な難しいことはわからなくても、そこにいた人たちが、自分がマオリであることに揺るぎない誇りをもって生きていることを肌で感じました。私たちの会ったマオリのファミリーは、特に家族の絆を大切にしているように思いました。酋長さんは、マオリの伝説の人物が自分から十代さかのぼった先祖である、自分はその子孫なのであるという誇りをもって、そのストーリーを語って聞かせてくれました。彼らがいなければ、今の自分たちは無いというのが物語最後の言葉でした。先祖に感謝し、マオリの伝統を自分の子供や孫たちにきちんと受け継いでいくのだという気概を感じました。小学生位の子供たちも、マオリ語で歌を歌い、伝統楽器を弾くことができ、食事前のお祈りも任される様子を見ていると、伝統や習慣が日常生活そのものなので

しょう。私たちが見られたのは良い面のほんの一部、ということもわかっています。「民族共生の先進国」と言われてはいても、社会的には、まだまだいろいろな問題がたくさんあると思います。でも、「自分たちはマオリだ」というアイデンティティを少しも隠すことなく暮らしていることが、何よりもまず素晴らしい事だと思います。たくさんの方を受け入れ、ともに暮らすニュージーランドだからこそ、それぞれの違いを認め合いやすく、共生も実現しやすいのかもしれませんが。日本もそうなるには、アイヌのことを学び、理解すると同時に、ちょっとした違いに拒否反応を示すのではなく、まずはそれを受け入れる、という国際感覚を養うことも一つの方法なのではないでしょうか。それが「民族共生」の一端を担うことができるのであれば、自分の関わる国際交流の業務において、一つでも多く海外のことを伝え、一人でも多く興味を持って理解してもらうことを目標として、これからも努力していかねば、と思うのです。

生徒達は、海外の人達と交流する楽しさを知ったことで、海外への興味がさらに湧いたことと思います。そして、英語を話せたらもっと楽しく、世界が広がるということも実感したでしょう。それが生徒達にとって、この先、英語を学んでゆく原動力になることを期待しています。たくさんの方の経験を積み、どんどん外の世界に出て行き、国際的な視野を広げ、それを登別の「これから」に生かしていってくださることを願っています。

最後に、今回の派遣で、小笠原市長を始め、教育委員会の方々、私が所属する部署である企画調整グループの上司、及び職員の皆さんに、私を引率者の一人として同行する機会を与えてくださったことを心から感謝します。また、ニュージーランドとともに旅してくださった煤孫団長、上武さん、6人の生徒の皆さん、清野さん、そして、惜しみないご協力をくださった保護者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。